



TITLE:

西[遊]夢録(蘇國)

AUTHOR(S):

瀧川, 規一

CITATION:

瀧川, 規一. 西[遊]夢録(蘇國). 地球 1927, 8(4): 282-289

ISSUE DATE:

1927-10-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183338>

RIGHT:

かし得るものであらねばならぬ。

終りに臨み一言する。本論評は造山問題の解決に向つて何等明確なる方針を與ふる所がない

が、將來確立せらるべき最後の定説に對し其基礎の幾分にも開拓する所あらば蓋し多少の貢獻を致すであらう。

西 遊 夢 錄

(蘇國)

(I) 蘇國高地人の日常生活

瀧 川 規 一

蘇國高地人の日常生活を想像する時旅客の念頭に浮ぶ第一のものはその牧畜生活である。廣々とした野と云はず山と云はず牛馬、羊、山羊が草を食んで悠々自然の野趣を點綴して到る處に養牧の閑寂な生活を見せてゐる。吾々都會人にとつてそれが如何にも悠閑な情趣を感じしめる。英蘭のなるい丘陵の連續した天地から急變して蘇國の山岳湖沼の絶勝、人奥の鼻つかぬ大自然に入つてこの散點せる放牛放羊を見ると共に、高地人の住家の見すばらしさを想ふ時、嘗つて蘇國の文豪ツア・ウオター・スコットの歴史傳説小説を讀んで空想した豪族及びその一門徒黨の起臥した世界が夢の如く消え去つて居ることを感じさせられるのである。

親よ子よ今いづくにさまよふや。

彼等の樂しみの場所ば海のがなたに遙かに去れり。

夕開時に吾等ななぐさむる心僅しき乳搾りの娘今やなし。

家畜を追ふ兒等野の上に姿を見せず。

雲雀は今も空高くとび、

榮ある歌をうたへり。

うるはしき曉の歌も、

今は耳を傾くる人もなし。

旅門の人々は失せぬ、

偉勳は只物語にのこして。

風にとぶもみがらの如く、

彼等は遠くに／＼に飛び去れり。

とは Fundach nau Gaidheal と題するゲールンク語の歌の意である。歌ならずともまのあたり見る目をして題意の「高地人消散せり」を如實に感ぜしめるのである。

一、牧羊者。

すさみ行く高地人の村落にはあばら屋とも山小屋ともつかず石を疊んで壁を作り、藁草を藪うて屋根とせる小屋が山と山との峽にぼつり／＼一つ宛離れて物潜しく建ち、家の附近に僅かばかりの野菜作りの畑は日々の必要を充たしてゐるらしく、山腹に散點する山羊羊の灰影白姿、黒褐の牛馬の放ちあるを見れば、必ずや大人か男の兒、時には小娘が語らふ友もなく山岩の上に棒を横へて腰を据えてゐるのを見うける。家畜を飼ふ人であるとは聞かすとも知るのである。

昔は家畜の飼養頭數によつて各人の富を計算した。牧養業者が灰色の格子縞の毛布に身を包んで居ることは今も昔も變りはないが、牧養業者のみが今日猶榮え残つてゐる高地の生活である。現今の生活を述ぶるに三百餘年も昔の物語をするのもおかしいが、エリザベス女王の時一五八五年に蘇國の高地に遠征軍を遣はし、一豪族から五萬頭の家畜を奪ひとつたと云ひ、今より百五十年前、英軍のカンパランド公の軍隊が蘇國で暫時の間に二萬頭の家畜を集めたと云はるゝ程に如何に牧業が盛であつたかを想像せしめるに充分である。若き Prince Charles Edward が英政府に對してなした旗擧げの失敗後英政府の斷乎たる禁制によつて一七四五年以後高地人の生活基調であつた家長族長制度が廢止され、高地人の好戰的性質は抑壓された。これに加ふるに交通機關の發達社會經濟組織の變化の爲めに昔の高地人の華々しき生活は次第に影をひそめ、遂には豪族が扶養せし族員は武人より轉じて俄か百姓となつた。族長の血統者として教育ある人間として

High House と呼ばれてゐた高い地位を俄百姓がとるやうになつた。豪族は低廉なる地代にてこれ等の僭地人に賃貸しをなし、僭地人はまた土地農地をまたがしに貸し、同族員中にては Cowan 即ち小屋住ひとして呼ばれてゐた貧困なるものに斯くて生活の業を興へた。人口の稀薄なる地方をしてそれすら猶益稀薄ならしめた。また南方地方より牧業をなすべく入り込み来る者すら生じ、純なる牧業が事業化する傾向となつた。余が高地の山間からオーバン (Oban) 港行の列車中に同席した一青年は八年間ヒブリヤース (Hebrides) で牧業をなしてゐたが、閑を得たのでオーバンに出て船にて南に行くこと云つてゐた。この青年の話が若し眞ならば、低廉なる土地を撰んで或る事業家が大规模に放牧をなし、賃銀制度で南方から多くの使用人を集めて一儲けをするのだと云ふ。上述の高地人の生業變化を實證する一實話だと思つて聞いてゐたのである。牧養業者と連關して Down と稱する業をなす者のあることである。牧養業者は飼養した家畜を市場まで送り出す時このツローヴァに依託するのである。幾百頭幾十頭と數多き家畜の群を追うて遠き道程を山野を越えて行くのである。彼は家畜の食ふ可き草のある道をとつて行かねばならぬ。道路として立派に築き上げた道を決してとつてはならない。もしそんな道をとるときには家畜をして足を痛めしめるからである。また數多き家畜を追ひ行くに一頭にても見失つてはならぬ。彼の熟練した敏感なる耳はたとへ一足でも群から離れるならばそのひづめの音をきいて夜間であらうとも直に追ひ戻つて

來ることが出来る。夜間と雖もまた決して畜群を野に入れ自らは屋根の下に安眠を貧ると云ふが如きことは彼は決してなさない。必ず畜群の温か味の間に横つて眠るを常とするのである。オートミールと水と、角びんに入れた僅かばかりのウイスキとをもつて日夜の旅の糧とする。斯くて彼は幾多の家畜と共に山にかり寝の幾夜を経て目的地に達する。今日こそ重要地には鐵道があり、それによつて畜群の運ばるのを見ることが旅中にても屢あつたが、鐵道は昔の長距離を短縮せしめたに過ぎぬ。今も猶幾山野を超えて荷積みの出来る地點まで家畜の群を追ひ、家畜と共に市場まで來るのである。牛追ひの男は今日でも世間知り物知りとして尊重され、彼が道程中に經驗する幾多の山川湖沼の變化、風景の美、村落の人情風習の知識は彼をして尊敬するに足る程の知識と禮儀となわきまへしめる。斯くして牛追ひ男としては想像以上の紳士的言語態度に人を驚かしめると云ふ。蘇國の北方高地に養はれた家畜が英蘭の沃野に飼ひ放たるゝ時は目立つばかりに肥え太る。Norfolk, Suffolk, Essex, Lincolnshire の沃野は家畜飼養者が特に飼ひ放つ場所であると云ふ。

二、麥の收穫と麥粉作り。

高地にて麥穗を叩いてうちおとすに日本のからゝに似たるものを用ふことは兼ねてから聞いてゐたので一度見たきものなと思ひしが旅行季節の都合にて見る事が出来なかつた。力強い男等がから卒をつかつて麥穗をうちおとし、これをふるひにかけて、もみからを去り、粉にすべき準備をする。

女は藁その他のものを脊にのせて運ぶ。英蘭人はオートミールを喰ふこと蘇國人程多からずとて十八世紀の文學界の大立物ジョーンソン博士の惡口は餘りに過ぎたりと思はれる。英國の馬の食物が蘇國では人間の食物だ」とはジョーンソン博士の言葉であつた。旅宿にあつてオートミールを食べる毎に常にこれをおかしくも想ひ出してはひとり微笑してゐたのであるが、余が食べたものは美味で博士の惡口に慣ずるものではなかつたと確信してゐる。同じ野かせぎの勞働者でも英蘭の勞働者はパンと園子とベーコンとを食べてゐるに拘らず、それより簡單なオートミールと牛乳としか腹に入れぬ粗食の蘇國勞働者よりも働きの力が弱くながく續かないと云ふ。胃の弱き病人には醫師は必ずオートミールをすすめる。輕く消化がよく滋養があるからと云ふのであらう。博士の言が眞とせば「蘇國の働き人と英蘭の馬と同一の食物をとつてゐるとも、兩者並稱さるゝ程に夫々の種類のうちで最も有用な最良なものであることを一面から認めたことを博士の言が物語つてゐる」と蘇國人は云ふ。

蘇國のオートミールは有名なものであつて、蘇國に旅したと云へば人は必ずオートミールを食べたかと問ふ。今日では風車水車の粉磨き場で麥粒をつぶされて製造され、或は動力によつて多量生産を必要とする今日、昔にあつたやうな手びきのオートミールを食べることは不可能になつてゐる。器械びきの蕎麥が専ら市場に供給されてゐる今日、吾々は眞の手うち蕎麥の味を珍らしとして賞味するのである。それと等しく二人

の婦人が置いて上石の縁につき立てた棒を片手ににぎり、平
圓板の二枚石をぐる／＼廻してひき碎いた眞の手びきのオー
ト即ち Handmill のオートは遺憾ながら旅客の止宿すべき處
にては得られない。Mullean-bra とは手びき臼のゲーリッ
ク語であるが、女の手に碎かれたオートミルを求めても今
日では所詮駄目とあきらめて、只徒に物の本を讀んで空想す
るに過ぎない。まして水車小屋を経営した地主等が自己の營
業を保護する目的にて、手びきオートを作ることを禁じ、禁
制を破つてゐる現場を見つける時は白を碎いた時代があつた
と云ふ。斯くて能くまめに働き動くことももつて英人の歎賞
的となつてゐる蘇國婦人の手になつた手製の麥粉の菓子な
口にするのは老人等の話題として聞くに止まるのである。

三、婦人の仕事。

農家の婦人の大抵は男子に劣らぬ荒仕事をする。農業の手
傳は勿論のこと、家事萬端の細々した煩はしい仕事は皆婦人
の手によつてなされる。食事の準備の爲めに時間がとれ、婦
人修養の時間を空費するの、洗濯女にまでなり下つて婦人の
個性を失ふの、また裁縫の爲めに無益に時間を勞費して趣味
生活を奪ふのと、こたくを並べて、借るに見損ひの白人婦人
生活をもつて、世人をあつと云はせるやうな生活は富豪の生
活ならいざ知らず、國家の中堅をなす働きの生活をなす家庭
では世界到處見られない。若しそんなことを云つたら、蘇
國では一笑に附し去つて、餘りの空想に耳を借すものもなか
らう。と思はれる程に蘇國の婦人達はまめ／＼しく働いてゐ

るのが、旅客の忙しき目にも映する。家の外で働くのが女
の働きではない。

修養や趣味を口にするのみが眞の修養でも趣味でもない。
化學的な洗濯は家庭にて出来ぬにしても、家で洗へるものは
悉く女の手で洗つてゐる。衣類の繕ひ、靴下のつづくり、肌
着の洗濯、家庭の料理など女中までも節約して働いてゐる婦
人が多い。舊式の日本婦人の働き振りを見馴れてゐる吾々の
眼には蘇國婦人の働きも左程珍らしくはないが、見損ひの西
洋通をふり廻す言説の聲に耳馴れた者には却つて物珍ら
しく思へるのである。

蘇國の高地地方の田舎に行くと、溪流に流るゝ岩清水に、
連立つた婦人が日本の鹽同様のものを運び、肌白き脛を見せ
つゝ、素足にて洗濯物を踏んで居る。お安くない處を見ない
とも限らない。美しき娘達が集つてゐる素足の洗濯姿のあた
りを若者等がぶらつくこともあるが、若し若者が不法な好
奇心を面にあらはさうものならば、セルト民族のナイアドの
女神達は何んでその儘に見逃しておかう。男の衣物のすぶ濡
れになるまで、水に洗めて膺懲の憂き目を見せるのは必定で
ある。それ程に婦人達にも腕がある」とは宿でのよもやま話
であつた。

Sir Walter Scott の有名な小説 Waverley 中に Baron
of Bradwardine に召し使はるゝ女中達の洗濯の有様を叙説
してゐる處がある。叙景は先づ幽遠なる庭園から始まる。「手
入れの行き届いた庭園には果樹が多く、花卉や常緑樹に充ち

て居り、何れも何か奇怪な形に切り揃へえられてある。花壇芝生の臺は一段一段と次第さがりに設けられ、西屏より大きな一つの溪流に達する。溪流が庭園と境する邊は水の流も静かであり、水の面も滑らかである。でも溪流が庭園を離るゝ處に行けば一つの堰がある。今まで静かなりし水流は堰を超えて糸漣をなして落ちてゐる。漣を見下ろす處に一亭がある亭の屋上には金色の熊の姿が風見車の代りなしてゐる。水は堰を飛び超えて自然のすさまじき水勢をなしつつ生え茂れる鬱蒼たる樹林の谷間に姿を隠す。樹林の間から聳え立つものは *Eractarine* の *Barons* 等が昔住居せし圓塔である。

大きな而かも廢れた圓塔である。庭園の向ふに至つて溪流の渚は狭き芝生となつて居る。こゝが洗濯をする草原である。

草原のうしろは流の堤が老木の密林で蔽はれてゐる。草原には二人の娘が各廣い桶のなかに立つて、腰まで裸なる二つの足をまめに動かして脚足を洗濯の器械となしてゐる。流の向ひ岸に立ちあらはれた見知らぬ眉目清秀な一青年を見た娘等は昔物語の *Arnida* の處女達の如くに立ちとまつて口を揃えて近寄る客人に挨拶の言葉を交はしたのではなかつた。この娘二人はその青年の姿に驚いて、今まで自由にまくり上げた装束を忽ち下ろし、*Ed. Sider* と云ふ驚愕の金切り聲を振りあげると共に、追はるゝ鹿の如くに速くに飛び去つた」とある。これは大意である。蘇國高地の溪流に集ふ洗ひ女の姿は旅客の急ぎ足には目に止まるべくもないが、密林の溪谷と清き流れと、林間に聳え立つ昔の豪族の住家たる苔まびた

城塔の数々はこゝかしこに見らるゝ情景である。地方誌を讀み、城郭の歴史を聞き、ありし昔の戦物語やローマンスの話を書いて空想に旅愁を忘れることは一再にして止らないのである。手びきのオートを作るときも、清流に濯ぎ物をする時も、高地人特有の歌を娘等は仕事しつつ歌ふ。ゲーリックの歌 *Oghair a Cath-Dunaidh* は「金髪的青年」と云ふ題意である。「妾の心を惹きつけし汝の美に吾は欺かれたり。汝が與へし約束を吾が心はあまりに信じ過ぎたり。」と歌の句を始め、コーラスは「オー金髪の青年よ、流るゝ浪の髪の子よ金髪の兒よ。汝の顔は吾が破滅であつた」に終る。ロツホ、ローモンド (*Loch Lomond*) 湖上で聞いたり、ハミルトンのドーム内で合唱の歌を聞いた美しい乙女の唇を洩るゝ美聲を斯うした溪流の洗場にて想像する以外に實況を目撃することは不可能である。

今日全く廢れて見るを得ざるものには羊毛を梳り之を紡ぐ手ぐり器械がある。凡てが大仕掛けな器械工業化した今日この手ぐり器械の存在をなくした。吾が邦に於ても手ぐりの糸くり車は今日影を秘めて居る。自分等の幼時には田舎では猶も見られたが、今日では玩具の手ぐり車か、博物館ものしか見られない」と蘇國の知人は吾々が日本で云ひさうなことを云つてゐた。でもホーム・スパン・ウールと書いて「日本あたりで賣られてゐる舶來毛布地があるではないか」と問ひ質すと「それはさう稱するのであるが、昔のやうに實際家庭の婦人の手になつたものか否かは疑はしい」と云ふ。「うち織りの

「前物だ」と云つて尊重する風習が偏にせよ昔が邦でも残つておればよいがと思つた。でも土地の人にきくと成程器械でやれば、櫛で羊毛をとく Carding は迅速に出来るが、紡ぐことは器械でやれば手ぐり程完全には出来ないと云ふ。田舎に行けば家で羊毛を梳り、紡ぎ、さうして織つたきれ地が器械製より優ること萬々であると云ひ且つ信じてゐる人々が多い。器械ものには女の眞情が入つてゐない」とは余が直接に聞いた言葉である。

羊毛は二種に分ける。長いのと短いとの二つに分ち、長い毛は梳る。短毛は一時から四時までのものであり、梳る櫛は木框の上に革皮を蔽ひ、皮の上に密に立てた針金の短い齒がある。これで羊毛は交ぜられたり絡らまされたりして梳かれるのであるが、それは柔かくて主として靴下若くは荒目の厚地の毛布に使用される。長い毛は三時から八時に至るものであつて、カード Card と呼ばれる方形櫛で梳き所謂カーザングをされる。大抵の家庭では二三種のカードを備へつけてある。櫛を適度に温めておいて、先づ長さ四時ばかりの齒が最も廣く間隔をとつておかれてある櫛で、齒間に毛をさし填めて梳く。同じやうな手續きを次の櫛でなし、最後に齒の最も細かい櫛に移して、毛を一方の方向に滑らかにしておいて力まかせに強く長い毛をひきぬく。仕上げたものは紡ぐために巻いておく。梳齒にひつついて残つたものは前の短い毛の方に入れる。羊毛を洗ひ、乾し、油に滴す等の手續きを一々述べる煩を避けるが、この羊毛の調製は北國の冬の夜長の仕

事として家庭婦人に悦ばしき豫ぎと満足とな興へる光景である。

美しきタータンは今日でも全く蘇國北方の高地の特産物であるが、何事も器械化した今日市場に賣り出されてゐるものは亦婦人いそしみの手から離れてゐると云ふ。

羊毛を紡ぐ方法はフアウストの割に出て来るマーガレットが紡いでゐる糸くり車よりも更に簡單である。これすらも今日は器械工業の手でなされるやうになつてゐる。然しながら田舎で暇に委せて紡ぐ有様の簡單なるは驚くばかりであつて、腰にさした一本の棒の先からみつけた羊毛の束から、纏ツムおもりな、小供が玩具のコマをまはすが如くまはして紡ぎ出すのである。普通に Spindle と云ふ Distaff と云ふは錘と棒との英語であり、ゲリックでは夫々 Dsalgan と云ふ Cui geell と云はれて居る。

四、釣、漁業、鹿追ひ。

釣師の親玉には東洋には太公望あり、英國には Complear Augler の著者 Walton あり、其他 Johnson, Byron, Dr. Paley, Sir Humphrey Davy 等多数の知名の士が釣に浮世の憂さを忘れたのである。無害の魚を釣にかけて欺きとるは物の哀れを知らぬ無情の人のするなぐさみだと屁理屈をつけて横文字の人道家がなすやうな動物保護會の感傷言はこの場合禁物である。海や下流から上り来る鮭を捕へる爲めに大庭園などにては金曜の晩十二時から土曜の晩十二時まで堰の扉をあけて鮭の上り来るのを待つことがある。扱て亂漁は魚類

を絶やす恐がある。されど豪族等が廣大なる自己の領地にて亂漁をなすことがあつて、爲めにその數を減ずるのだと云はれてゐる。蘇國は鮭、ますの名物である。名士の遊びとして釣りの催しが屢ある。沼澤の邊に立つ孤獨のホテルはこれ等の釣師の宿となり、アングラス、ソサエチーの規則さへ出来てゐる。鮭のことをゲーリックにて Bradan と云ひ、鱒のことを Breac と呼ばれてゐる。人の知るが如く鮭は卵をつける爲めに下流から長流に遡る。Parsine の Erch 河に Keith と云ふ丈三尺ばかりの瀧があつて、そこに二三尺の巾の堰孔から水が出て水道に流れてゐる。水淺き時には下の水だまりに鮭の泳いで居るのが岸からよく見える。ゲーリックにては瀧のことを Easan と呼ばれ、蘇國語では Linu と云はれて居る。瀧壺にては二三群の鮭が浮游跳躍してゐる勇ましい姿を見る事が屢ある。竿と糸と釣及び餌の鮭の知識については大人よりも小供の方が上手だと蘇國人は云つてゐた。

鮭の次に英蘇國の國產たるものは鯡である。鯡の魚群はアイスランドから押し寄せて六月の中頃に一方英蘇の東岸を渡り、他方蘇國の西岸へブリザス (Hebrides) に来る。舊記によると蘇國人は紀元九世紀に既に和蘭人に鯡を賣つてゐたと云ふ。國王セームス三世の時に獎勵された鯡の漁業以來一時は亂漁の結果產出減少したが、今日は漁業局の監督の下に一定の法規を作られ、鯡業の復活を見るに至つてゐると云ふ。漁業季節は高地人の活躍を見ることが今も昔も變りがない。英蘇を通じて狩獵の盛なることと、それが富豪の娛樂の一

であることと、従つて獵犬飼養の發達とは日常英蘇の新聞記事にて知るところである。蘇國特産の大鹿が山岳の巖角に立つて雄々しき柴角を空に高くあげて、周邊を窺つてゐる姿を見ることがある。エツチングや油繪にて見るそのまゝの様子をして雄鹿が立つてゐるのをねらひ打ちをして射とめることは只畫家の空想ではない。高地人がこのねらひ打ちの妙手であることは旅客が屢耳にする處であり、高地にては Gille (少年の意) すら狐や鹿を一年に幾頭と倒すことがあると云ふ。獵の折にはギリが幾人と儲ばれ、素足のまゝで巖角を攀ぢ、へづを踏んで、獵獸をその隠れ家から追ひ立てる。幼時より鍊えられた蘇國高地人が狩獵の妙手を出すのは尤なことである。この狩獵の集り程勇ましく男子的な娛樂はない。誤つて人間を射ると云ふやうなことはよしんばあつても、それが爲めに狩獵全廢論を唱へる程には英蘇人は感傷的ではないと云うてゐた紳士があつた。英詩やゲーリック詩中に狩獵を讚美した詩の數多くあるを見て、詩人文學者が徒らに涙もろい感傷人でないことが判る。また鹿の雄雌や仔鹿等についてゲーリックや英語の語彙の多きことを見て、鹿狩りが如何に彼等の興味をそまつたかが判る。狐追ひと惡口云はるゝ英國貴族よりも鹿追ひ鹿がりの人と云はるゝ方が耳觸りがよい。

五、最後に述ぶべきはウイスキーである。ゲーリックにてはウイスキーのことを Uisge beatha と云はれ、今日大仕掛けの釀造化學工業によつて多量に製産さるゝものよりも、小さき

壺にて作られる手製のウイスキーが美味であると云ふ。その蘇
國人の誇りを實證として呉れる特志家を吾は發見し得なかつ
た。蘇國高地人が麥芽にて醸造したビール類を古代から飲ん
であつたことは事實であるが、ウイスキーは十八世紀に於てす
少量しか蘇國に於て得られなかつたと云ふ。一七四五年に叛
王プリンス・チャールズ・エドワードの下に加つてゐた蒙族
Cope が戦鬪を拒み、兵士の爲めにウイスキーを注文して彼等
の將軍の爲めに祝盃を舉げると聞いて大にプリンスが悦んだ
と云ふ話がある。これによつて見れば十八世紀では既に場合
によつては多量を集め得たと思へる。酒類醸造の密造は蘇
國にてはこゝかしこに行はれてゐたらしく、收税吏が來ると

北米合衆國に於ける地理學界 (三)

寺 田 貞 次

醸造倉の屋根上に合圖のしるしをして他の密造者に警報とな
したと云ふ。Uisce beatha は果して今日のウイスキーであつ
たか疑はしいと云ふ人がある。

六、二本の劍を十字にかはして床上に置き、その上を巧に
踊る劍踊りは蘇國高地の踊りとして有名なものであるが、こ
れ亦見る機會を得なかつた。劍踊のことをその踊の調子の名
によつて高地人は Gille Calum と呼んで居る。余が見るこ
との出來たのはリール (Reel) とカレドニアン (Caledonian)
の踊りであつて、倫敦に於て屢蘇國軍人のダンスを見る機會
があつた。

ハーバート大學 此處では、前述の如く、地質學部の一部
として、Geographical Laboratory が在るので、覗いて見

る。だいぶ廣い室で、學生百名位は僅に收容し得よう。室内
には書棚もあれば、地圖函、地球儀等を始め、ボストン附近
の浮彫圖をも準備して居り、室の一隅には、事務室迄も設け
てある。最初はだいぶ力癪を入れかけた形跡がうかがはれる
然し現今は、地理學としての研究は、營まれて居ない様で、

北米合衆國に於ける地理學界

地理は、School of teacher で、幾分講ぜられて居るのみ、
大學の講座には之を發見しなかつた。

カリフォルニア大學。校庭の中央なる、高い記念塔の前方
に、長い二階建の新しい建物が在る。サウスホールと云ひ、
地理學及び經濟學の教室で、地理學の研究室は、其の一半部
を占めて居る。ハンチングトン氏の紹介で、主任のザウアー
C. O. Sauer 教授を訪ふ。折よく面會の幸を得、授業の初ま